

機関番号：25406

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530519

研究課題名 (和文) 障害者の父親の生活意識に関する検証

研究課題名 (英文) A Study of the awareness of fathers with the regard to the life of intellectually disabled children and their wives.

研究代表者

三原博光 (MIHARA HIROMITSU)

県立広島大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：10239337

研究成果の概要 (和文)：質問紙調査及び個別事例をとおして、障害者の父親の生活意識を明らかにすることができた。

研究成果の概要 (英文)：A questionnaire and one example survey was used to investigate the awareness of the fathers of the Intellectually handicapped with the regard to the care.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008 年度	600,000	180,000	780,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1600,000	480,000	2,080,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会福祉学

キーワード：障害者、父親、生活意識

質問紙調査

1. 研究開始当初の背景

過去、障害児家族に対する調査は、主に障害児と母親の親子関係に焦点が当てられ実施されてきた。それは、母親の育児意識やストレス問題の調査報告、母親の悩みの軽減を目的としたケースワークの事例などの文献報告に見られた。このような傾向の背景には、子どもの主たる養育者が母親であり、障害児家族の心理的安定には、母親のストレスの軽減が重要であるという考えが存在するので

はないかと思われる。一方、障害児の父親については、子育ては母親に任せているなどの理由により、過去、父親の調査の拒絶によって、調査の実施が困難であった点が指摘されている。そこで、障害児の父親は、お金を稼ぐ経済的支援者として役割を担っていると考えられてきた。しかし、今日、核家族化が進む現代社会等のなかでは、障害児の育児に対しては、父親や地域からの協力を得なければ、母親の力だけでは、障害児家族の生活上の間

題解決は困難になってきている。近年、発達障害児の母親の育児ノイローゼによる子どもの殺害事¹⁾を考えると、父親の育児への協力は不可欠であると言えよう。

以上の様な研究背景のなかで、障害者の父親の生活意識を検証することにした。

2. 研究の目的

本研究では、障害者の父親の育児意識のみならず、父親の職場での状況、社会に対する気持ちや行政への期待など社会生活に密着した質問項目を含め、障害者の父親の意識を明らかにすることを目的とした。

3. 研究の方法

調査は、障害者の父親の意識を把握するための質問紙調査を実施した。質問紙調査は、調査協力の承諾を得た施設および団体の代表を通して配布した。またその回収には各施設および団体に留置きによる回収と返信用封筒を用いた郵送法の併用にて行った。そして、東京都、兵庫県、山口県などの知的障害者育成会、知的障害者施設に配布をした。配布部数は 550 部、回答者の居住地域は 32 市町村であった。その結果、342 名から回答を得た。質問紙による調査項目は、(1) 対象者属性（年齢、職業、妻の職業の有無、居住場所）(2) 子どもの障害についての告知、(3) 育児と家事の問題、(4) 学校・社会的活動、(5) 職場での状況、(6) ストレスの解消、(7) 障害児を持ったことによる良い点・辛い点、(8) 死後の問題、(9) 社会に対する気持ち、(10) 行政への期待、であった。

4. 研究の成果

342 名の父親(34 歳～81 歳)から回答を得た。年齢は、50 歳代以上 275 名 (66.5%) であった。職業は、サラリーマンが 145 名 (42.6%)、自営業が 49 名 (14.4%) であった。220 名 (66.5%) の妻は働いていなかった。障害程度は、重度が 236 名 (72.0%) と最も多かった。障害の子どもの年齢は、216 名 (74.2%)

が 19 歳から 49 歳までであった。

(1) 子どもの障害についての告知

①子どもの障害を知ったときの気持ち

9 割が「ショックである」と回答していた。

②子どもの障害についての診断後、妻と障害について話しをしたか。

「話しをした」289 名 (88.1%) となり、9 割弱は妻と子どもの障害について話をしていた。

(2) 育児と家事の問題

①子どもの育児について妻と話しをしたか。

「話をした」が 270 名 (81.6%) であり、8 割は「話をした」と回答していた。

②日頃、障害のある子どもの育児への参加。

「参加している」207 名 (62.8%)、「参加していない」124 名 (37.4%) であり、6 割は、育児に参加していた。

③日頃、家で妻の家事の手伝いをするか。

「手伝いをする」173 名 (52.4%)、「手伝いをしない」157 名 (47.6%) の回答状況であった。

(3) 学校・社会的活動

①子どもの学校行事などの参加。

「参加する」224 名 (67.0%)、「参加しない」110 名 (33.0%) であり、7 割弱は学校行事に参加していた。

②知的障害者育成会活動に参加するか。

「参加しない」203 名 (60.7%)、「参加する」131 名 (39.2%)、6 割は知的障害者育成会活動に参加していなかった。

(4) 職場での状況

①子どもの障害について知った後、落ち着いて仕事ができたか。

「普通に落ち着いてできた」168 名 (51.3%)、「あまり落ち着いてできなかった」111 名 (33.9%)、「仕事を手につかなかった」36 名 (11.0%) という回答状況であった。

②職場で障害児について同僚(上司)に話しをしたか。

「話をした」206名(63.8%)、「話をしなかった」117名(36.2%)で、あった。

(5) ストレスの解消

① ストレスの解消方法

「妻との会話」の回答が最も多く、次いで「趣味に没頭する」の回答が多かった。

(6) 障害児を持ったことで良い点・辛い点

① 障害児を持たれて良い点

(a) 障害児を持たれて良いことがあったか。

「あった」218名(67.1%)、「なかった」107名(32.9%)で、6割強が良いことがあったと回答した。

(b) 良いこと理由

「他の障害児家族や多くの人々と知り合えた」が最も回答数が多く、次いで「人の優しさを知ることができた」「人間の尊厳について考えるようになった」の回答の順であった。

③ 障害児を持たれて辛かった点

(a) 障害児を持たれて辛かったこと

「あった」280名(87.6%)、「なかった」40名(12.5%)で、8割強が辛いことがあった。

(b) 辛かった理由

「周囲の冷たい視線や無理解を感じた」の回答数が最も多く、次いで「子どものしついで悩んだ」、「家族での外出が制限された」などの回答の順であった。

(7) 死後の問題

① 死後、心配すること

「障害児の世話」223名(69.8%)、「妻のこと」44名(13.2%)で、7割弱が死後「障害児の世話」を心配していた。

(9) 社会に対する気持ち

① 社会は障害者に対して冷たいと思うか。

「思う」234名(74.5%)、「思わない」80名(25.5%)で、7割は社会が障害者に対して「冷たい」と感じていた。

② 社会に対して援助などを期待している。

「思う」226名(72.7%)、「思わない」85名

(27.3%)で、7割は社会に対して援助などを期待していた。

(10) 行政への期待

① 経済的保障

「期待する」が284名(93.2%)で、9割は、経済的保障を期待していた。

② 障害者の働く場所の確保

「期待する」が275名(90.5%)で、9割は障害者の働く場所の確保を期待していた。

③ 母親の働く場所の確保

「期待をする」が165名(57.5%)、「期待をしない」が122名(42.5%)で、6割弱が母親の働く場所の確保を期待していた。

(11) 研究の考察

調査結果から、障害者の父親の意識が明らかにされた。それによると、9割の障害者の父親は、子どもの障害についての診断を告知されたとき、ショックを受けていた。しかし、そのうちの5割が落ち着いて仕事ができたと回答していた。これらの父親は落ち着いて仕事ができたとしても、心の中はそのショックの気持を抑えて、仕事をしていたのではないかと考えられる。

家事について、半数は家事に協力し、9割強が、妻が病気になった場合困る理由として「家事」をあげていた。今後、父親は育児だけでなく、炊事や洗濯などの「家事」も積極的に協力して行くことが必要とされよう。

3割弱の障害者の父親は妻との会話を持つことでストレスを解消しており、家族内での繋がりは強い傾向がみられた。8割の父親が育児について妻とよく話し、6割は育児や学校行事に参加し、妻に対しては協力的であった。これは、本調査の父親や知的障害児の年齢が、ある程度、高くなっていることも影響しているのではないかと考えられる。父親の7割が50歳以上、子どもの年齢も7割が19歳～49歳の成人に達しており、夫婦ともに障害の子どもの問題などをある程度、解決し、乗り越えてきたので、より協力的な

夫婦関係になっていると考えられる。

多くの父親が、社会は障害者に対して冷たいと感じていた。それは、7 割の父親が「社会は障害者に対して冷たい」と回答していたことから理解できよう。これは、父親を含めて障害者家族が、過去、社会のなかで、障害者のことで差別的体験をしてきたことが影響しているのではないかとされる。それは、8 割の父親が障害児を持って辛いことがあったと回答し、137 名 (27.8%) がその理由として「周囲の冷たい視線や無理解を感じた」とあげていることから理解できよう。しかしながら、父親は社会が障害者に冷たいと感じたとしても、障害のある子を持ったことに対しては、6 割が良いことがあったと回答していた。そして、その理由として、「他の障害児家族や多くの人々と知り合えた」と「人の優しさを知ることができた」などの肯定的な面を述べていた。このように、父親は、障害児を持ったことで、社会は障害者に対して冷たいと感じていたものの、他の人々との関わりにおいて好ましい体験をしていた。

9 割の父親は、行政に経済的保障を期待していた。自由記述欄のなかで、「誰も、社会も金銭的に助けてくれない。家計も苦しいし、身体も介護でボロボロである」(10 歳の重複障害児の 42 歳の父親)と述べていた。一方、別の父親は、「障害者自立支援法によって、家族の負担だけ増えた。何とか変えて欲しい」(34 歳の自閉症の娘の 65 歳の父親)と述べていた。この回答結果の背景には、障害者家族の困難な経済的な事情もあると思われる。

次に 9 割の父親は、行政に対して障害者の働ける場所の確保を期待していた。父親は、障害者に対しても働くことで社会に貢献する、あるいは充実した毎日の生活を期待しているのであろう。また、母親に対しては、5 割が働く場所を期待していた。これらの父親は、障害者の世話に追われながらも、母親にも社会の一員と

して働く場所を行政に期待していると思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

①三原博光・松本耕二：知的障害者の父親の意識に対する考察. 発達障害研究, 2010, 32, 191-201, 査読有

②三原博光・松本耕二：障害者の父親の意識に対する検証. 障害者問題研究, 査読有

〔学会発表〕(計 1 件)

①三原博光・松本耕二：障害者の父親の意識に関する研究. 日本社会福祉学会第 56 回大会、2008 年 10 月、岡山県立大学.

〔図書〕(計 1 件)

三原博光編：日本の社会福祉の現状と展望：障害者福祉の現実. 岩崎学術出版社, 20-47、2011

6. 研究組織

(1) 研究代表者

三原博光 (MIHARA HIROMITSU)

県立広島大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：10239337

(2) 研究分担者

松本耕二 (MATSUMOTO KOUJI)

広島経済大学・経済学部・准教授

研究者番号：60264983